

# プラチナポラリス

chrcc

戦争が、二週間ほど前から始まっていた。

子供がいう様な無茶苦茶な理論を盾に大国が戦を煽けたのは、奇妙なバランスで成り立っている共産主義国家であった。端から見れば、どちらも正しくなかったし、どちらも危うかった。それでも、戦は始まり、人が死に、人殺しが英雄と囃された。戦地から遥か離れた土地で生きている僕たちは、テレビが伝える何処か嘘くさい映像に傷つけられていた。

僕の家に来るなり、タバコ、タバコと連呼した北村さんは隣を歩いている。

今日くらい吸わなきゃいいじゃないですか、と諭したのだが、どうしてもタバコを買いに行くとはいはる。たった今来たばかりの恋人を、タバコを買いに行くだけだとはいえ見送りたくはなかったから、付き合うことにした。

十時半を過ぎていた。除雪車の通った跡が付いた道には誰一人として歩いていない。

どちらともなく、手を繋いだ。

「自販機、十一時までだよねえ。あれ、十時だっけ。ねえ」

「知りませんよ。俺、タバコ吸わないから」

そんなやりとりをしながら、北村さんが、顎から喉仏、喉仏から黒いマフラーの下の鎖骨をゆるやかな曲線で繋ぐように、ゆったりとした動作で首筋を伸ばして空を見上げた。何故か、北極星を見つめているのだと思った。

雪明かりのせいか、自ら薄く発光しているような白い首筋に、彼との行為を思い出した。

突きあげられて喘ぐ時、北村さんは行為の激しさに相応しくないゆったりとしたスピードで、首筋を伸ばす。そのまま背中を反らせて、荒く呼吸をするのだ。

空を見上げている北村さんは、薄く唇をあけていた。

それが更にその行為を僕に思い出させるのは詮方ない。

「北村さん、やらしい」

北村さんの首筋を見つめたまま、言ってやった。

「何、考えてんの」

と、北村さんはこちらを向いて小さく頬を膨らませた。

「変なこと、考えてんの」

「だって、仕方ないです」

「何が」

「北村さん、やらしいもん」

北村さんの真似をして、頬を膨らませてみた。

北村さんが、僕の右の頬を、繋いでいない方の手で、ぺち、と叩く。

「じゃあ、帰ったら、やらしいこと、しよう」

北村さんが言うと、「やらしいこと」が「やらしくないこと」の様に聞こえる。隠れて小犬を飼おうとか、新しい抜け道を見つけたとか、そういうことと同じ位置に「やらしいこと」があるみたいに聞こえるから、何を言っているのか一瞬分からなかった。

「帰ったら、やらしいこと、しよう」

北村さんがもう一度言った。

今度はきちんと理解できた。はい、と慎重に返事をした。

「いっぱいしましょう。やらしいこと」

態と意地悪く笑った。北村さんは、くつつつと肩を揺らしていた。

気付けば、もう目の前に交差点があった。信号機の端にある赤色が絶えず点滅している。雪ですっかり隠れてしまっている横断歩道を渡れば、軒先にタバコの販売機が二つと清涼飲料の販売機が三つ並ぶ小さな商店がある。

真ん中の清涼飲料の販売機の上には、電光掲示板が設置されている。黒地に赤い文字はそれだけでも目を引くのに、右から左に流れるのだから、どうしても目で追ってしまう。

見れば、その販売機で売られている飲料の情報だった。MDプレーヤーやら、スクーターやらが当たるキャンペーンをしているらしい。

向こうに流れる文字を読みながら、道を渡った。

北村さんが財布の中の小銭を眺めて、小さく舌打ちをした。それから札入れから千円札を一枚取り出した。販売機に飲み込ませようと、紙幣を挿入すべき箇所に千円札を挿入する。販売機に半分ほど飲み込まれたが、千円札は機械音と共に吐き出された。

札の向きを変えたり、掌で折り目を伸ばしたりしては、また販売機にそれを飲み込ませようと挑む。しかし、その度吐き出された。

「無理」

何度も吐き出された千円札を僕に押しつけながら北村さんが言う。

代わりにタバコを買え、ということらしいから、仕方なく千円札を受け取って、さっきまで何度も北村さんが行っていた動作を繰り返す。

千円札は、吸い込まれるように販売機の中に消え、代わりに沢山のボタンに赤いランプが付いた。

北村さんが好んで吸っているタバコを探す。そのタバコの下にあるボタンの上に指を置いて振り返れば、北村さんはあの電光掲示板を眺めていた。

「これでいいんですね」

尋ねれば、北村さんはこちらを一瞥して頷いた。

ボタンに置いていた指を奥へと進めた。沈んだボタンに付いていた赤いランプだけをのこして、他のランプが消える。

カタ、と音がして商品が取り出し口に落ちた。

商品を取り出している間に、釣り銭が落ちる音もしたので、釣り銭も取り出した。

タバコと釣り銭を手渡す間も、北村さんは電光掲示板から目を離さなかった。

そんなに熱心になるようなニュースでも流れているのか。僕が電光掲示板に目をやった時には、もう、飲料のキャンペーンを知らせる文章が流れているだけだった。

「今日は、死にたくないよ、俺」

北村さんが、言った。今の状況で、発せられるべき言葉ではないような気がした。

は、と問うた。は、何言ってるんですか、と問えば、北村さんが、ひたりとこちらを見つめる。

くうばく、とかすかに吐息だけで発音した。

北村さんが熱心に見ていたのは、空爆が行われたことを知らせるニュースだったらしい。今日、いつ頃、何処で空爆が行われて、何人死んだ、そういったニュースだったらしい。

吐く息が、白い。今までも、ずっと息は白くなっていた筈なのに、目の前をうねりながら消えていくそれが、今になって急に気になった。北村さんの顔がはっきりと見えないのが嫌だった。

白い息の向こうで、北村さんが手渡されたタバコと釣り銭をコートポケットに突っ込んだ。

「死にたく、ないですねえ」

言って、僕は北村さんから目を逸らして、黒く広がる空に銀色の北極星を探した。

泣きそうだった。

今日も、明日も、死にたくなくて、泣きそうになっていた。

「帰ったら、やらしいこと、しなくちゃいけないし」

冗談めいた台詞を吐いて、逸らした目を、再び北村さんに向けた。北極星は、見つけれなかった。

「帰ろう」

北村さんが、僕の右手を握って言った。

帰り道、月が冬特有の鋭さを持って煌々と輝いていた。星は控えめに散らばっている。北村さんと繋いでいる手を、ねえ、と言って引いた。

「何」

言って、北村さんが僕の顔を覗き込む。

相手の目を見て会話をしたがる北村さんは、並んで歩いている時でさえ、相手の顔を覗き込んで視線を合わせようとする。

「北極星、ってどれでしたっけ」

北村さんと視線を合わせたまま、顎をしゃくって、空を見るように促す。

「あれ」

そう言って、北村さんが指さしたのは、丁度電柱の真上の星だった。

「あれ、ですか」

「だって、一番光ってるし」

「そっか」

「違うの」

「分かんないです」

「あれ、ってことにしておこう」

「あれ、ってことにしておきましょう」

吹き溜まっていた雪が風によって舞い、丁寧に除雪された道の上をさらさらと移動する。切れかけの街灯が、いい加減なリズムで点灯していた。

帰ってすぐ、僕らは「やらしいこと」を行った。

行為の最中、北村さんが、泣いた。

僕たちが北極星と決めた星は、窓の外でじっとしていた。

今日も、明日も、死にたくない。